浮気妻の制裁

第七巻　淫らな妻の特徴

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　管理人の手で
■海老沢薫ＢＬＯＧ
■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

※海老沢薫　ＢＬＯＧ

http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

・・・『羞恥』『露出』『辱め』をテーマにした小説シリーズや、各種コンテンツ情報などを配信。

■著作権について

「浮気妻の制裁　第七巻　淫らな妻の特徴」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

若妻、萌々は白昼のマンションの管理人室で一糸纏わぬ姿となり、隣家に住む主婦の麻子と六十代の男性管理人の前でその美しくも卑猥な裸身を余す所なく晒した。

そして、萌々は麻子の指示で想像以上の屈辱を味わう事になる。

「か、管理人さん・・・私の、は、裸を見た感想を教えてもらえませんか？」

「あ、あの・・・私の○○を揉んでもらえませんか？」

「管理人さん・・・私の○○も弄って・・・イカせてもらえませんか？」

目の前で自分の裸身を見つめる管理人に向かって、麻子に教えられた卑猥なセリフを次々と吐かされる萌々。

而して、美しき若妻はついに忌み嫌っていた管理人に体を弄られて悶え狂い、屈辱に喘ぎながら絶頂を果たしたのだった。

「萌々ちゃん、何も本当にイクことないじゃ

ない。管理人さんビックリしてるわよ。管理人さんの顔を見てちゃんと謝りなさい！」

麻子はイキ果てた若妻を嘲笑い、さらに辱めようとした。

「管理人さん、さっきは、イ、イッてしまって・・・すみませんでした」

萌々は一糸纏わぬ姿のまま土下座させられ、屈辱の謝罪をした。

若妻の土下座に興奮した管理人はスマホでその姿を撮影し始め・・・。いつしか白昼の管理人室では美しき若妻のヌード撮影会が開かれ、萌々は麻子と管理人から様々な卑猥なポーズを強要される。

引きつった笑顔を浮かべながら両手を頭の後ろで組んでガニ股、そしてガニ股のまま両手でピースサイン。さらには大股開きで床に座り、自らの手で秘部を押し広げ・・・。

萌々は卑猥なポーズを披露し続ける間に、次第に妖しい快感に全身が侵されようとしていたのだった。

■第一章　管理人の手で

白昼のマンション管理人室では、二十四歳の若妻、白石萌々が六十代の男性管理人と隣家に住む主婦、麻子の前で一糸纏わぬ姿となり、両手を頭の後ろで組まされ豊満な乳房や下腹部の恥毛を晒していた。

淡いピンク色の乳首や下腹部の黒い茂みに管理人のギラギラした視線が突き刺さるのを感じた萌々は、恥ずかしさに全身を震わせ、両脚の太股を擦り合わせて悶えた。

麻子は若妻が羞恥に咽ぶ姿を暫し堪能した後、萌々に近づきその耳元で何やら囁きかけた。

「いやぁん」

麻子の言葉を聞いた萌々は思わず苦悶の表情を浮かべ、小さな喘ぎ声を漏らした。しかし、さらに麻子に何か囁きかけられると、静かに頷いて見せた。

管理人は二人のやり取りをじっと観察し、

全裸の美人妻が苦悶の表情を浮かべる姿を見ると股間を痛いくらいに膨らませていた。

「さぁ、萌々ちゃん、管理人さんに何か言いたいことがあるんでしょ？早く言いなさい」

麻子は再び椅子に座ると、素っ裸で震える若妻に向かってそう呼び掛けた。

麻子の言葉を聞いた萌々は唇をギュッと噛みしめ、思わず麻子を鋭い眼差しで睨みつけた。その表情は男の欲情をそそり、管理人はズボンの奥でイチモツをピクンと痙攣させた。

「何か文句でもあるのかしら？別にいいのよ、アナタがその気ならこっちにも考えがあるから」

麻子は自分を睨みつける若妻に向かって強い口調で訴えた、

隣家の麻子に決定的な弱みを握られている萌々は、その言葉を聞くと急に怯えた表情を浮かべ、すぐに「ごめんなさい」と謝った。

「分かったら、速く管理人さんにアナタが言いたい事を言いなさい！」

麻子が再びそう命じると、萌々は顔を真っ赤に染めながら管理人の顔を見つめ、震える声で言葉を紡ぎ出していった。

「か、管理人さん・・・私の、は、裸を見た感想を教えてもらえませんか？」

素っ裸の若妻の口から飛び出した思わぬ言葉に六十代の管理人は驚き、唖然とした表情でその裸身を改めて眺めた。

きっと美しい若妻は年増の主婦に脅されて無理矢理はしたない言葉を言わされているのだろうと、管理人にはすぐに分かった。それなら、この美しい若妻の裸身を思う存分堪能して、せっかくの機会をおもいきり楽しんでやろうと管理人は考えたのだった。

そして、管理人は若妻の豊満な乳房や引き締まったウエストからお尻にかけての扇情的なライン、下腹部の恥毛などをじっくりと鑑賞した後、萌々の問い掛けに答えた。

「とっても綺麗だな。ただ随分とスケベな体つきをしておる」

管理人がそう告げると、萌々は恥ずかしさのあまり思わず腰を後ろに引いて悶えた。

「良かったわね。綺麗だって」

麻子は若妻が羞恥に咽ぶ様子を面白そうに眺めながら萌々に声を掛けた。

「あ、ありがとうございます」

萌々は俯いたまま管理人に御礼を言った。

「萌々ちゃん、管理人さんに何かお願いがあるんじゃなかったかしら？」

素っ裸で立ち尽くす若妻に対し、麻子は次の指示を実行させようとした。

「あぁっ、はい・・・」

萌々はさっき麻子に耳元で指示された事を思い出し、恥ずかしそうに頷いた。

そして、顔を上げ目の前に座る管理人の顔を再び見つめた。

「あ、あの・・・私の、オ、オッパイを揉んでもらえませんか？」

萌々は震える声でそう告げた。

「えっ？」

管理人はあまりにも大胆な若妻の言葉に驚きの声を漏らした。

きっとそのセリフもさっき年増の主婦が教えた言葉に違いないと管理人はすぐに分かったが、それでも若妻の羞恥プレイを楽しむために敢えて驚いたフリを続けた。

「どうして私がアナタのオッパイを揉まなきゃいけないんだ？」

管理人は素っ裸の若妻に対して意地悪な問い掛けをした。

「それは・・・」

まさか管理人からそんな言葉が返ってくるとは思っていなかった萌々は。なんと答えれば良いか分からず戸惑った。

傍にいる麻子は意地悪な質問を投げ掛けた管理人とそれに困惑する若妻の姿を面白そうに眺め、暫く黙ってこの状況を見守ることにした。

「なんで管理人の私がアンタのオッパイを揉まなきゃいけないのか聞いているんだ！」

管理人はわざと声を荒げ、素っ裸の若妻を精神的にいたぶった。

萌々は初めて見る管理人の険しい表情にますます戸惑い、頭の中が混乱した。元はと言えば管理人に吐いた大胆なセリフは全て麻子に教えられて無理矢理言わされたものだったので、萌々は堪らず傍にいる麻子に縋るような目を向けた。

しかし、麻子はただ薄笑いを浮かべるばかりで、管理人を宥めようとも、萌々に何らかの指示を出そうともしなかった。

「答えないなら、この件はマンションの自治会に通達するが、それで良いか！」

管理人が荒々しい口調でそう脅迫すると、萌々はもう自分の言葉で何か答えるしかなかった。

「わ、私はただ・・・」

萌々がそこまで言いかけたところで、麻子が不意に口を挟んだ。

「管理人さん、この人はきっと欲求不満なん

ですよ。だから色んな男の人に自慢の胸を揉んでもらいたいんじゃないかしら」

麻子がそう告げると、管理人は麻子の方を見て意味深な笑みを浮かべた。

「そうなんですか？白石さん」

管理人が少し落ち着いた口調で問い掛けると、萌々はもうそれに頷くしかなく、「はい」と小さな声で答えた。

「まったくしょうがないなぁ。こんなことまで管理人がしなきゃいけないのか」

管理人は嬉しくて堪らない心の内を必死に隠し、面倒臭そうにそう言いながら椅子を立ち上がった。

管理人が目の前に立つと、萌々は思わず後ずさりして身構えた。以前から生理的に無理なタイプだった男にいざ乳房を揉まれると思うと、体が勝手に拒否反応を示してしまったようだった。

「自分からオッパイ揉んでくれって頼んでおいて、どうして逃げるんだ！」

管理人が再び声を荒げると、萌々はもう覚悟を決めるしかなかった。

「ご、ごめんなさい・・・」

萌々は後ずさりするのを止め、乳房を突き出した格好で管理人の手が伸びてくるのを待った。それはまるで注射の時に注射針が皮膚に刺さるのを待つ瞬間に似ていた。

「あぁん」

管理人の分厚い手が乳房に触れると萌々は思わずはしたない喘ぎ声を漏らした。

麻子は若妻が管理人の手で感じる姿を見ると満面の笑みを浮かべ、からかった。

「あら、ちょっと触られただけでそんなに感じるなんて、アナタよっぽど淫乱なのね（笑）それじゃあ管理人さん、せっかくだからこの人の乳首をおもいきり弄ってもらえますか？」

麻子が笑いながらそう言うと、管理人は心の中で喜びを爆発させながらも、それを一切表情には出さず、相変わらず面倒臭そうに「仕

方ないですな」と言いながら若妻の乳首を指で摘まんで弄り始めた。

「あぁん、いやぁん」

萌々は堪らず天を仰いで喘ぎ声を放った。その姿を見た管理人はますます調子に乗り、もう片方の手も胸元に伸ばして、両手で若妻の左右の乳房を同時に揉みながら、指先で乳首を摘まんだり弾いたりして弄んだ。

「あぁん、あぁぁん」

萌々は両手を頭の後ろで組んで立ったまま悶え狂った。

「もう乳首をこんなに硬く尖らせるなんて、アンタ本当にスケベなんだな」

管理人が呆れた口調でそう言うと、萌々は悶えながら悔しさに唇を噛みしめた。

それから、管理人は若妻の豊満な乳房をその感触を味わうように丹念に揉みしだき、萌々は次第に全身が快感に侵されていくのを感じた。

「ヤダぁ、アナタ股の辺りからお汁が溢れて

きているわよ」

突然、麻子が驚きの声を上げると、萌々は思わず自分の下半身に目を向けた。

すると、麻子の指摘通り、秘部から厭らしい蜜が溢れ出て太股を伝い、脚元へと流れ落ちているのが分かった。

「いやぁん」

萌々は自分が管理人の手で感じてしまっている事を思い知らされ、激しい羞恥に襲われた。

「せっかくだから、お汁が溢れているアソコも弄ってもらったら。ほら自分の口でお願いしなさい！」

麻子が恐るべき提案をすると、萌々はさすがにそれだけは許して欲しいといった表情で首を左右に振ったのだった。

■海老沢薫ＢＬＯＧ

・・・海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『清楚な美人妻　彩２７歳　絵画モデル編』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281

『清純派女優　結衣２４歳－国民のペットへと堕ちていくヒロイン－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802

『清純派女優　結衣２４歳－女神の憂鬱－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675

『女教師　玲奈25歳－女性教諭の前代未聞の不祥事－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186

『美人社長　里帆２６歳－若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885